

highlight

連載

highlight MUSEUM 迎英里子 / okazaki today 石川奈都子 /
はじめてのカンゲキ 吉崎拓海、富田菜織、田村紗矢香(京都堀川音楽高校) /
わたしと京都会館 有馬えり子、大西禮子

劇場と祝祭

特集

特別寄稿 詩「劇場賛」 建畠哲

インタビュー 森山未来

八角聡仁 教授による解説！

人は祭りに日常とは異なる感覚、体験、そして祈りを託します。では、劇場における祝祭とはどのようなものになるのでしょうか。

1960年、産声をあげた「京都会館」は、2016年1月「ロームシアター京都」として生まれ変わりました。

長い年月にわたって継承されてきた生活文化、芸術文化を現在へと受け継ぎながら、新たな価値を生み出す祝祭が1年を通じてはじまります。

この場に集うすべての人たちと共にロームシアター京都の誕生を祝い、新しい「劇場文化」を創りだしていきます。

highlight(ハイライト)とは、演劇や映画などの見せ場、最も明るいところを意味する言葉。観客と劇場をつなぐコミュニケーションペーパーとして、「劇場」の可能性と京都・岡崎地域の文化芸術資源に光を当てていきます。

劇場賛

建 畠 哲

劇場とは輝ける祝祭であり、心躍る夢である
劇場とは咲き誇る悪徳であり、燃え盛る地獄である
劇場とは大いなる励ましであり、優しい抱擁である
劇場とは出口のない絶望であり、癒されることのない悲しみである

劇場とは安らぎ、劇場とは救済
劇場とは苛立ち、劇場とは反目
劇場とは鼓舞、劇場とは高揚
劇場とは断念、劇場とは葬送

劇場とは湧き上がる哄笑、飛び交う怒声
渦巻く歓喜、押さえ切れぬ憤怒
豊饒、倦怠、豪奢、扼殺、自由、抑圧

そう、劇場にはすべてがある！
劇場こそは都市！ 終わりのない都市の祝祭！
蘇りし我らが劇場に末永く幸あれ

－ 解 題 －

都市が劇場をつくるのではなく、劇場が都市をつくるのではないか。たしかに都市は劇場の母であるのかもしれないが、母が自らの子供によってはじめて母たりうように、母として共に成長しうるように、都市は劇場を生むことによって都市として共に成長しうるのだ。劇場はたしかに世話のやける子供ではある。しかし母たる街に一層の魅力をもたらすのもまた、苦勞して育てたその劇場に他なるまい。



建 畠 哲 Akira Tatehata

詩人、美術評論家。1947年京都生まれ。1972年に早稲田大学文学部卒業後、「芸術新潮」編集者、国立国際美術館長、京都市立芸術大学長などを経て、2015年より多摩美術大学長、京都芸術センター館長に就任。専門は近現代美術。詩人としても活躍し、1991年に『余白のランナー』で歷程新鋭賞、2005年に『零度の犬』で高見順賞を受賞、2013年に『死語のレッスン』で萩原朔太郎賞を受賞。

劇場と祝祭



interview

森山 未来

Mirai Moriyama

森山未来さんは、2013年から約1年間、イスラエルに渡って、インバル・ピント&アヴシャロム・ボラック ダンス・カンパニーで活動されました。そして3月、ロームシアター京都のオープニング事業の一つ『談ス』にも出演されます。そんな森山さんにぶつけてみました、「劇場と祝祭」について。

写真／片岡陽太

日本人としてのエンタテインメント感覚と生身の肉体

— 2014年に行われた『談ス』の初演は青山円形劇場で行われたこともあり、祝祭性に通じる雰囲気がありました。

森山：創作の初期段階から、祝祭的なイメージというのは持っていましたね。談話する、座を囲む、というのが一つのテーマだったので。ロームシアター京都での公演は円形の舞台ではないですけども、円を描く動きや、チョークで床に絵を描いて一回りする趣向なども一部残っているので、“サイクル感”はあると思います。

— 初演時、観客も一緒になり、共犯者に似た意識で楽しんでいましたね。

森山：それは、『談ス』を一緒にやる(大植)真太郎さんと(平原)慎太郎さんたちのユニット“C/Ompany”の舞台を観た時に僕も感じていた感覚です。演者が黙っていると、お客さんは身体だけ、表情だけを観ることになるのですが、まずはそこを開放し、敢えて喋ってしまう。そうすることで、お客さんのハードルが下がるんですね。入り口の取り方として、開いたところから始まることを大事にしています。

— どんな観客が来るかわからない劇場という空間自体、本来的には開かれた場所ですが、2013～14年に文化交流使としてイスラエルで活動された経験も踏まえてどう感じになりますか？

森山：劇場と客席の隔たりをどう意識したらいいのか、よく考えるんです。たとえば能では、死んでいたり神様だったりといった霊的な存在が中心となりますが、日本人はその感覚から抜け出せないと言うか、舞台に立つ人間には今も、何かを媒介する存在であることを期待する傾向がある気がします。美ということ言うなら、求められるのは『源氏物語』の光源氏のような、蒼白で、男とも女ともつかない中性的な存在。一方、西洋では、ダヴィデ像みたいな、筋骨隆々で「実存しています」という感じの存在が尊ばれます。イスラエルに行って改めて強く感じたのは、自分は露骨に日本人で、日本のエンタテインメントに関わってきて、そういう

精神性でやっているということ。実際、僕は踊る時も演じる時も、傀儡(くぐつ)化するんですよ。何かしらのキャラクターを演じている。それは悪いことではないし、向こうの人もそういうものとして受け入れ、逆にユニークだと感じてくれたりもするんですが、表情一つ、身体の置き方一つとっても、もっと主体的に存在できないか、と考えるんです。

— 傀儡になるのとは違った在り方ということでしょうか？

森山：そうですね。先日、人と話していて「(舞台に立つことは)プレゼント(present)かリプレゼント(represent)か」という言葉が出てきました。リプレゼントが主体的というより何かを介して舞台に立つことなのに対して、プレゼントは今現在の生身そのもの。『談ス』はそれこそ真太郎さんの在り方がそのままだから、こちらら“まんま”でいなきゃならない。この舞台でコンタクト(※身体同士の接触から動きを展開していくこと)を学べたことも大きいですね。色々なコンタクトがあって、フェイク的なものもあるんですが、真太郎さんのやり方は、本当に身体同士を当てて、体重をかけて、自分がいるんだということを相手に伝えるもの。こういうコンタクトのしかたも、プレゼント／リプレゼントにつながる話だと思います。なので『談ス』ではそういう在り方をイメージしやすいんですが、僕はストーリーのある映画やドラマも続けていきたいので、いかに自分自身であることを崩さずにフィクションの中に飛び込んでいけるのか、すごく考えますね。どんな作品であっても、自分が役柄に没入していくというよりも、役を自分に引き寄せるようなイメージで、できるだけ、自分のままでやっていきたい。とはいえ、傀儡になった瞬間の自分の気持ち良さや、観る人にとっての美しさもあるから、完全に捨ててはいけないうんだろうとも思うし、そのバランスは課題です。

— さらに、森山さんの場合、知名度があり、映像など様々なところからのファンがそれぞれの「森山未来」というイメージをもって劇場に観に来ます。

森山：それは僕がコントロールできることはありませんが、

昨年秋にやった『ユダ、キリスト ウィズ ソイ〜太宰治「駈込み訴え」より〜』にしても『談ス』にしても、もちろん良い作品を提供したいし、表現として自分なりに求めるところが必ずあるけれど、それだけでなく、まずはこういう舞台に触れてもらう環境を作りたい、そのためには知名度が必要だという気持ちはありますね。だからこそ、やれるだけやろうという共通認識で、『談ス』は15都市もツアーするんです。実際に観て「分からない」と切り離す人もいるかもしれないし、受け入れてくれる人もいるかもしれない。後者に賭けているし、分からなくても、触れたか触れなかったかで大きく違うのではないかと考えています。ロームシアター京都での公演もどんなリアクションが返ってくるのか楽しみです。

— 15都市の中で、京都に対するイメージはどのようなものでしょうか？

森山：関西の中でもコンテンポラリー・ダンスが活発なイメージがあります。ダムタイプの存在が大きいのかな？ 昨年の春ごろ、ミラノの展示会を観たのですが、そこでは新人アーティストの作品からコンペで優勝者を決めているらしく、僕が行った時、歴代の優勝作品が並んでいたんです。会場は壁も床も天井もすべて装飾で埋め尽くされた昔の宮殿で、そこにコンテンポラリーな作品が陳列されていたのが新鮮でした。重厚な歴史的・文化的背景を持つ場所だからこそ、現代のアーティストはその空間に何を乗せるかを考え、抽象的で斬新な作品を生み出していく。そういう意味で、ミラノと京都はどこか通じる気がします。歴史があったり情緒があったり、時には排他的だったりもするからこそ、自由度の高い作品が成立するのかもしれない。昨年の舞台『死刑執行中脱獄進行中』では、京都を拠点とするMonochrome Circusで活動していた森川弘和さんと共演しましたが、かりそめじゃない、すごく生な身体感覚の持ち主で、あの身体は京都で育まれたのかなあと想像したりもします。ロームシアター京都には大・中・小のホールがあるそうですが、これから様々な表現の受け皿になっていくのでしょうね。

interview

森山 未来

祝祭空間に宿る根源的なもの

―場所ということ言うと、アート系のフェスティバルなども、広義の祝祭空間だと言えそうです。国内外のフェスティバルをご覧になってどう感じますか？

森山：フェスティバルでは、色々なところで同時多発的に公演やインスタレーションが行われているので、場所から場所へと移るとき時間の流れや空間が持つ力を感じます。たとえば瀬戸内国際芸術祭では、人口が50人くらいで70歳以上の人が多く住む犬島にアート作品をぼんぼんぼんっと散りばめているわけですが、僕が感動したのは、作品や街並み以上に、作品と作品の間に通るさびれた道や、孵化している最中の蟬や巨大なムカデを見たこと。作品が展示されていてそれを辿る順路があることに馬鹿馬鹿しさをおぼえたからこそ、僕の視点はそっちに向いた可能性があります。馬鹿馬鹿しかったり滑稽だったりするものって、人を惹きつけるし、滑稽さの間から力強い生命が立ち上がってきたりもする。そういう提示のしかたもまた、フェスティバルならではのかもしれないですね。

―作品が存在することで、その前後にある景色が違って見えることってありますよね。

森山：そういう体験で言うと、インバル・ピント&アヴシャロム・ボラック ダンス・カンパニーの一員としてロシアのフェスティバルに参加した時、湖畔でのパフォーマンスを観たんです。綺麗な砂浜にトラスを立てて照明を作っていて、その下で舞踏的にパフォーマーが蠢(うごめ)いていた。でも印象的だったのは、照明にものすごい数のコバエが集っていて、それありきで作品を観る感覚があったことでした。この作品では最後、湖畔と砂浜の間で何かを燃やして火を焚いて、その火をぐぐってみんなが奥に去って行く。するとトラスから水が降ってきて火に当たり、火が消えます。火を実際に消したのは水ではなく操作なのかもしれないのですが、とにかくそのことによって煙幕が現れ、さらに虹が生まれる。この虹も作り物ですが、それがやがて消え、今度は湖畔に蓮みtainな花が浮かび上がって、その中には男性や女性が裸で寝そべっていて。ああいうふうに、自然現象を使っている瞬間と作為的な瞬間が混じっているのって、すごくいいなあと感じました。

―確かに、舞台の醍醐味は、計算された部分としきれない部分の融合にあるとも言えそうです。

森山：だと思います。舞台に立つ人間について言うなら、それが芝居であろうとダンスであろうと音楽であろうと関係なく、ダンサーから、あるいは役者から、一歩はみ出しちゃっているような人に僕は興味があります。さっき言ったプレゼントとはちょっと違うかもしれないけれど、見てはいけないものを見てしまったんじゃないだろうかと思わされたり、その人の存在にただ惹きつけられていたり。作為的な設定があったとしても、それが超自然的な人そのものの強さと結びつくことで面白くなるケースは多いように思うんです。

―ところで、大勢で盛り上がる祝祭というものは本質的に、楽しさも危険も孕んでいます、その点はいかがですか。

森山：人間は人間である時点で、殺人・姦淫・盗みの三つを禁じられていて、生き物としてバグっている。その規律を瞬間的に外していいのが祭りですよね？ 神や仏に担保してもらって日常の枷を取り外し、一瞬だけ動物に戻ることで、自分を保っているというか。ただし、僕自身は子供のころ、いわゆる祭りには参加してこなかったもので、あまり馴染みがないのですけれども。

―では、森山さんにとって、日頃の枷を取り除くお祭りにあたるものとは何なのでしょう？

森山：やはり、それが舞台だということになるのでしょうか。

勿論、本当に人を殺すわけではないけれど、その世界に入っていくことで、自分自身の枠が広がっていくというフィードバックもありますし、トランスするという感覚もある程度、わかります。

― 一見すると祭礼的な色合いが濃くない舞台でも、観ていて「わあっ」と感じさせるものにはある種の祝祭性があるのかもしれない。

森山：結局、現代的な作品であっても「わあっ」と思えるものは強いと思うんですよ。老若男女問わず感じるものというのは絶対にある。音楽でも、たとえば大昔の中東やアフリカのものや日本のポップソングは、色々な要素をはぎ取ると、ある共通した旋律を有していると聞いたことがあります。理論的な話かもしれないけれど、それだけではなく、何か、人の奥底に眠っている感覚でもあるのかな、と。こういうことってどの分野にも必ずあって、それを組み合わせて絶対に「わあっ」としたものにしかならないというのがお祭りですよ。そういう作品作りも良いのかなと、最近考えます。抽象的なこと、ごく個人的なことを語るのは面白いし、多様な選択肢を用意する作品もいいのですが、僕にはエンタテインメントの世界に生きなきゃという気持ちがある。たとえ抽象的な作品であっても、どこかでそういう根源的なエネルギーを意識しながらやっていきたいんですよね。

インタビュー・文／高橋彩子



森山 未来 Mirai Moriyama

1984年兵庫県生まれ。数々の映画・ドラマに出演する一方、幼少時からのダンス経験を活かし「テヅカ TeZuka」「ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ」「100万回生きたねこ」「PLUTO」等の舞台でも活躍。文化庁文化交流使として13年秋より1年間を主にイスラエルに滞在、インバル・ピント&アヴシャロム・ボラック ダンスカンパニーを拠点に活動。

／ 八角教授による解説！ ／

劇場と祝祭

八角 聡仁 Akihito Yasumi

(批評家／近畿大学教授、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員)



演劇と祝祭は古来から深く交わってきました。それは固定した秩序から離脱する遊戯＝playであり、経済的にも言語的にも通常の交換体系を超えた浪費と破壊が行われる場です。そこでは、日常を律する規則が停止し、価値の倒錯が起こり、時間が切断される。そのことを通して社会はリセットされ、混沌の只中から新たな活力を取り戻していたわけです。

言うまでもなく、現代社会では演劇がそのような役割を果たすことはありません。いまだ劇場が祝祭性のイメージをまとっていることは確かだとしても、それは日常生活の鬱憤を忘れて束の間の「夢」をみるといった程度でしょう。社会を根本からリセットするような祝祭の代わりに、プリセットされた断片的、散発的な祝祭がメディア空間に遍在して、資本主義経済の中で消費されています。祝祭を単にカーニバル的な狂騒のイメージで捉えるかぎり、また現代的ストレス発散の手段として考えるかぎり、まさに「都市に祝祭はいらない」ということになるかもしれません。

しかし祝祭の本質は、人々をいったん秩序から遊離させることによって、世界を多元的に見つめなおすための感性を押し広げることにあるはずです。祝祭がしばしば

「断食」を伴ってきたことに注目してもいいでしょう。社会を空っぽにできなくても、身体を(そして精神を)空っぽにすることはできる。そう考えれば、舞台芸術は現代における新たな祝祭になりえます。劇場とは、さまざまな言葉や事物が普段属している文脈から離れて新たに結びつき、有用性、実用性の文脈ではあらわれてこない潜在的な意味を浮上させる場です。あるいは、情性的に反復されている日常の身ぶりや表情が忘却してしまった身体の可能性を見出すことも舞台芸術の重要な機能でしょう。

祝祭は必ずしも「日常」の対立物ではありません。むしろ日常と非日常の境界、もっと広くいえば、異質なもののや人々の「あいだ」に生じるものです。そこには具体的、物理的な場が欠かせません。ローマシアター京都では、KYOTO EXPERIMENTという舞台芸術の祝祭が開催されるそうですが、それを単なる「お祭り騒ぎ」にしないためには、文化の媒介者たるべき真に祝祭的な知性が求められます。たとえばオリンピックという「祝祭」に向けて現実を忘れかけているのが私たちの日常であるとすれば、非日常的な夢をみせるだけではなく、日常という夢から人々を覚醒させることも劇場の今日的な役割ではないでしょうか。

highlight MUSEUM

大学の先生が推薦者となって、いま京都から生まれている才能に光を当てます。
今回は、金氏徹平先生のご推薦、京都市立芸術大学の迎英里子さんをご紹介します。



「水蒸気のための舞台」2015



「アプローチ0.3」2015



「アプローチ0.3」2015



「アプローチ0」2014



「アプローチ1.2」2015

「アプローチ0.3」 photo by:Ken KATO
「アプローチ1.2」 photo by:Yu Sinoda

Comment :

私は様々な素材で作った装置を観客の前でありふれた動作で動かします。フィクションのシステムを装置として作り自分自身で動かすことで、無関係な状態の現象を直接的に関わることでできる状況に作り変えるためです。

私の作品は観客と地続きの中でパフォーマンスを行うことで、人との距離を縮めるものですが、劇場というのは、舞台と観客席とに隔たりのある巨大な空間にもかかわらず、親密な関係が作りだせます。それは、劇場がひとつの閉じた空間であり、現実とは切り離された状態で一定の時間を共有する特殊な場所だからなのだと考えています。



迎 英里子 Eriko Mukai

1990年兵庫県生まれ。2015年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。屠畜や雨の降る仕組みといった社会や自然の現象をモチーフにし、物事の理解に近づくためのパフォーマンス(実践)を行っています。2016年3月末よりGallery PARCにて個展開催予定。

推薦者:

金氏 徹平 Teppei Kaneuji (京都市立芸術大学 専任講師)

迎が展開するのは、この世界に存在する自然や経済などの仕組みを任意に取り出し、独自の解釈で自らが関わって駆動する装置へと置き換えるという作品である。世界を扱いながらも、美しくもなく醜くもなく、楽しくもなく悲しくもないこのパフォーマンスには新しいリアリティや価値観のようなものがあるのではないかと静かに期待しています。



「琵琶湖疏水 徳成橋より」 | 2015年12月9日

東大路通が琵琶湖疏水を越える場所にかかる徳成橋。春には疏水沿いに多くの桜が咲き、徳成橋西側にある夷川ダムと南禅寺船溜間の十石舟遊覧が行われる。2015年10月、琵琶湖疏水を構成要素とする京都岡崎一帯が、京都市内では初の国の文化財「重要文化的景観」に選定された。

石川 奈都子 Natsuko Ishikawa

写真家。京都の西陣に住まい兼アトリエを構え、1998年より作品発表を続ける。現在はインテリアや料理、工芸、建築、風景など、人と暮らしの繋がりを大切にあらゆる媒体で撮影を担当。
<http://ishikawanatsuko.jp/>

REPORT はじめてのカンゲキ 02 -京都堀川音楽高校生が鑑賞したのは「オペラ音楽セレクション」！-

初々しい劇場体験を率直な感想とともにお伝えします。
今回は、日本で唯一の音楽科単独の公立校、
京都堀川音楽高校の3人の1年生に話を聞きました。

ーこれまでにオペラを見たことってありましたか？

富田 1回だけ。びわ湖ホールで「アイーダ」を見ました。

田村 私も小さい頃なのではっきり覚えてないけど…「タンホイザー」だったかな。

吉崎 僕は今回初めて。すごく楽しかったですよ。特にヨハン・シュトラウスの「こうもり」！（パチパチパチと手を叩く）

田村 落ち着いて。

吉崎 あの人の曲は喜びがあるから大好きなんですけど、指揮者の方のやりたいこともよく伝わってきて、ここに愛情がある！ってめっちゃわかりました。

田村 私は断然「カルメン」です。

富田 うん、よかった！

田村 合唱の人たちが「ヒュー〜」って冷やかすような声を挟んだりするから、臨場感があって本当のオペラを見てみたいで。

富田 カルメンがバラをお客さんに手渡して、ステージの上に引っ張っていったりとかね。私はメゾソプラノで歌えたらというのもあるから、「カルメン」のハバナエラが特に印象に残ってます。



吉崎 声楽ってうらやましいと思うのは、思ってることを口に出せるから。僕はマリンバだから。だけど、富田さんはこれから声質が変わっていくからきっと…。

富田 今度は声楽を語りだしたね。

田村 オペラの話に戻そう。

富田 オペラの本当の舞台だとオケはピットに入っていて見えな
いけど、今回は舞台の上で演奏している様子も見られたから新鮮でした。

吉崎 楽器の編成とか、生で見ないとわからないこともたくさんあった！なんだけど、演奏会って高いから、お値段をほんとに安くしてほしい。

富田 お値段…。

田村 それは私も思います。普段クラシックをやっていない人でも行こうかなって気持ちになれるよう、もっと敷居を低く。

吉崎 学割にしてください！



吉崎 拓海 Takumi Yoshizaki マリンバ専攻

富田 菜織 Naori Tomita 声楽専攻

田村 紗矢香 Sayaka Tamura バイオリン専攻

京都市立京都堀川音楽高校に通う1年生。田村さん、富田さんが所属する京都市ジュニアオーケストラコンサートが1月、京都コンサートホール 大ホールで開催。

ロームシアター京都 オープニング・プレ事業
京都コンサートホール開館20周年記念
『高校生のためのオペラ音楽セレクション』
2015.10.22(木)／京都コンサートホール 大ホール
[指揮] 三澤洋史 ／ [オペラ案内人] 青島広志 ／
[管弦楽] 京都市交響楽団
[独唱&合唱] 新国立劇場合唱団、京都府合唱連盟
ピゼー：歌劇『カルメン』、ヨハン・シュトラウスⅡ：喜歌劇『こうもり』、ヴェルディ：歌劇『椿姫』、他

わたしと京都会館

—京都会館の50年を振り返る—

市民やアーティスト、京都会館に関わってきた人々の証言と資料をもとに、京都会館がこれまで歩んできた時間を紡ぎなおします。京都会館にまつわる思い出をお持ちの方、ぜひお話を聞かせてください。



有馬 えり子さん

Eriko Arima

1993年、有馬龍子の跡を継ぎ、京都バレエ専門学校第2代校長に就任。有馬龍子記念一般社団法人京都バレエ団代表理事。今年7月にはメインホールにて、京都市交響楽団の演奏、国立パリ・オペラ座から振付家・トップダンサーを招聘しての「ドン・キホーテ」全幕を上演予定。



9歳で発表会に出演した際の有馬さん

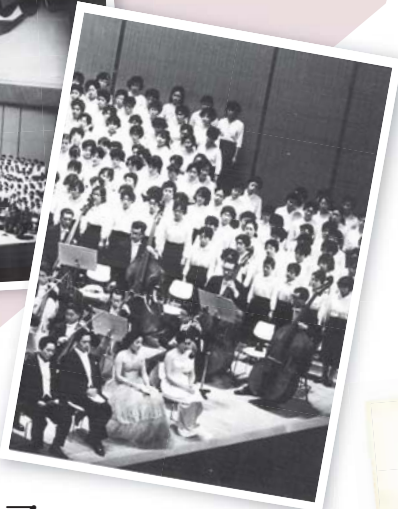
私は京都で生まれ育ち、この土地に愛着があり、京都会館へは人一倍強い思いを持っています。私の京都会館の初舞台は1964年。当時9歳で「くるみ割り人形」の兵隊の役をやりました。京都会館ができた時には、私の母で有馬バレエ団創設者である有馬龍子がとても喜んでいたのでよく覚えています。

京都会館の公演で一番思い出深いのは、1976年、京都バレエ専門学校開校記念で行なった「白鳥の湖」全幕公演です。ちょうど私がドイツのバレエ学校から帰国したばかりで、堤俊作先生の指揮、京都市交響楽団の演奏に黒鳥という大変な役をいただいて、もう心臓は止まりそうでした。姉がオデットを演じ、最後の姉妹共演となったのもいい思い出の一つです。

バレエ以外では、ザ・モンキーズが来たときは必死になって見に行きました。中学校で英語に一生懸命になったのは、「I'm a believer」を歌いかったからです(笑)。

写真は1960年4月29日、京都会館のこけら落としとして、京都市交響楽団がベートーベンの「第九」を演奏した時のものです。京都市交響楽団初代指揮者のカール・チェリウスさんの指揮、ソリストは伊藤京子さん、市来崎のり子さん、柴田陸睦さん、中山悌一さん。一線で活躍されていた素晴らしい方々と一緒に、私は市民合唱団の一員としてアルトで出演しました。チェリウスさんは厳しくてこわい先生でした(笑)。

その日の客席には、秋に結婚を控えていた彼と私の母もいました。それから55年。二人とも歳は80を越しましたが、先日も元気に京都コンサートホールで「第九」を聴きました。「第九」を聴くと、今でも背筋が伸びますね。



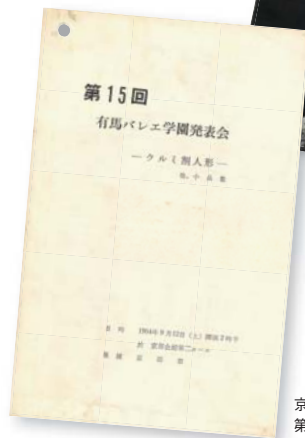
大西 禮子さん

Ayako Onishi

1933年、東京生まれ。京都駅前にあった丸物百貨店(京都近鉄百貨店)に勤務。定年後、合唱仲間誘われ音楽活動を再開。いまも夫や地域の仲間たちと音楽に親しむ生活を送っている。



有馬龍子バレエ団「白鳥の湖」公演プログラム(1976年)



京都会館で最初の発表会プログラム
第15回 有馬バレエ学園発表会(1964年)

「わたしと京都会館」の思い出 募集中

highlightでは、みなさんの京都会館にまつわる思い出のエピソードと資料を募集しています!

募集概要

コンサートチケットやパンフレット、京都会館で撮影した記念写真など、思い出の資料や写真、エピソードをお寄せください。highlight紙面や劇場の公式WEBサイトなどでご紹介させていただきます。応募の詳細は、京都市内施設で配布中のチラシまたは公式WEBサイト(<http://rohrmtheatrekyoto.jp/>)をご確認ください。

ロームシアター京都とは

2016年1月10日、50余年にわたり親しまれた京都会館がリニューアルオープン。京都市に本社を置くローム株式会社と京都市が50年間の命名権契約を結び、「ロームシアター京都」という新しい名を得て、京都における文化芸術の創造・発信拠点として人々の暮らしと芸術がつながる新しい「劇場文化」をつくり出す。

お問合せ ロームシアター京都

〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13
TEL: 075-771-6051 (代表)
FAX: 075-746-3366
<http://rohrmtheatrekyoto.jp/>

highlight vol.03

編集ディレクション: 竹内厚
アートディレクション・デザイン: 株式会社 フィールド
編集: ロームシアター京都 (橋本裕介、武田知也、長野夏織)
発行: ロームシアター京都 (公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)
発行日: 2016年1月10日(日) 禁・無断転載

ついに幕を開ける ロームシアター京都 オープニング事業

2016年1月～3月の公演

- | | | | |
|-----------------|---|-----------------|---|
| ● 1.10(日) | 開館記念公演・記念式典 | ● 2.15(月) | 小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXIV
子どもためのオペラ 喜歌劇「こうもり」
ローム クラシック スペシャル(ダイジェスト版) |
| ● 1.10(日) | 能楽特別公演 ～伝承 日本人の心～ | ● 2.18(木)、20(土) | 小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXIV
喜歌劇「こうもり」全3幕
ROHM CLASSIC SPECIAL(原語上演／字幕付) |
| ● 1.11(月・祝) | ロームシアター京都プロデュース・オペラ
「フィデリオ」(セミステージ形式) | ● 2.28(日) | 京都市消防音楽隊発足
60周年記念演奏会 |
| ● 1.16(土)、17(日) | 公益財団法人京都伝統伎芸振興財団創立20周年記念公演
八花絢爛～東京、金沢、博多から京に集い、八花街が京で舞う～ | ● 3.5(土)～27(日) | 搬入プロジェクトー京都・岡崎計画ー |
| ● 1.24(日) | 第329回 市民寄席 | ● 3.5(土)～27(日) | KYOTO EXPERIMENT
京都国際舞台芸術祭2016 SPRING |
| ● 1.30(土) | 日本舞踊特別公演 ～輝く日本の舞と踊～ | ● 3.21(月・祝) | きもの×京響 彩コンサート |
| ● 1.30(土) | ロシア国立ワガノワ・バレエ・アカデミー
「くるみ割り人形」 | ● 3.24(木) | 談ス |
| ● 1.31(日) | 公益財団法人京都市芸術文化協会創立35周年記念事業
第40回京都ビッグ・バンド・フェスティバル | ● 3.27(日) | 第15回京都さくらパレード |



京都市長
門川 大作

平成24年4月の閉館から約4年。長らくお待たせしましたが、いよいよ京都会館がロームシアター京都としてオープンし、多彩な公演によるオープニング事業を1年間に渡って開催してまいります。最新の舞台機構を備え、バリアフリー機能も充実したホールへと生まれ変わりました。立派な建物ができたということで完成ではなく、これから多くの方が日々の生活の中で身近に文化芸術を楽しむ「劇場文化」の創造・発信拠点に大きく育てていきたいと思っています。そのためのツールの一つとして、昨年4月に創刊したロームシアター京都の機関紙「highlight」も、今回で第3号を迎えることができました。演劇や映画などの見せ場を意味するそのタイトルのとおり、これからもロームシアター京都で行われる公演の見所はもちろん、岡崎地域の魅力あるスポットにも「光」を当てて御紹介していきたいと思っています。是非お楽しみに御覧ください。

PICK UP

小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXIV J.シュトラウスⅡ世：喜歌劇「こうもり」全3幕 ROHM CLASSIC SPECIAL〈原語上演／字幕付〉

2016.2.18(木) 18:30開演、2016.2.20(土) 15:00開演

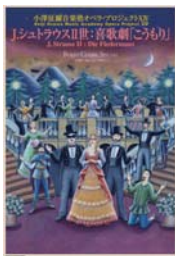
小澤征爾による、オペラを通じた 若手音楽家育成プロジェクトがついに京都で始動！

世界的指揮者小澤征爾が自分の音楽経験を後進の若手音楽家に伝えることを目的に2000年に始まった教育プロジェクト「小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト」が京都で始動します。J.シュトラウスⅡ世：喜歌劇「こうもり」全3幕(音楽監督、指揮：小澤征爾、演出：ディヴィッド・ニース)をグランドオペラで上演します。

〔音楽監督・指揮〕小澤征爾 〔指揮〕村上寿昭 〔演出〕ディヴィット・ニース
〔管弦楽〕小澤征爾音楽塾オーケストラ 〔合唱〕小澤征爾音楽塾合唱団

【会場】メインホール 【お問合せ】エラート音楽事務所 075-751-0617

主催：小澤征爾音楽塾／ヴェローザ・ジャパン、京都市、ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)
共催：公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション 協賛：ローム株式会社 企画・制作：ヴェローザ・ジャパン



VOICE

小澤 征爾
Seiji Ozawa



©Shintaro Shiratori

オペラも上演できる劇場ができることは、みなさんが思っているより京都の大きな宝になると僕は思っています。そんな劇場を拠点に、オペラを通じて若手を育成する音楽塾を開催します。この音楽塾は、毎回、リハーサルの日と最後の日ではまったく別のグループかというくらいにメンバーが大変身するのが面白いんです。「こうもり」は、セリフの入るオペレッタですが、魅力的なメロディやハーモニーがあって、とても深い音楽性を持った曲ですので、どんな方にもきっと楽しんでいただけたと思います。京都で初めての音楽塾、その成果にご期待ください。

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2016 SPRING

2016.3.5(土)～27(日)

時代に問いかける国際フェスティバルが、 ロームシアター京都をメイン会場に開催！



©Takuya Matsumi 地点「光のない」2014

「KYOTO EXPERIMENT」は、2010年にスタートした京都発の国際舞台芸術祭。今回は、11の公式プログラムのうち、5プログラムがロームシアター京都で行われます。新作が国内はもとより世界からも注目を浴びる劇団地点とチェルフィッチュ、維新派の松本雄吉×関西演劇界注目の劇作家・林慎一郎の新作公演、フランス・ダンス界を担う気鋭の振付家ダヴィデ・ヴォンバクの野心作など、いずれも注目劇団、注目作が揃っています。日常を打ち破るような、実験(=EXPERIMENT)精神に満ちた舞台を目撃してください。

【会場】サウスホール、ノースホール、ローム・スクエア
※他に、京都芸術センター、京都芸術劇場 春秋座、京都府立府民ホール"アルティ"、京都国立近代美術館なども開催

お問合せ

KYOTO EXPERIMENT事務局
TEL 075-213-5839(平日11:00-19:00)
www.kyoto-ex.jp/

主催：京都国際舞台芸術祭実行委員会(京都市、ロームシアター京都、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団、京都芸術センター、公益財団法人京都市芸術文化協会、京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)

【ロームシアター京都で行われるプログラム】

- 3.5(土)～7(月)
「渴望」ダヴィデ・ヴォンバク(ダンス／フランス)
- 3.5(土)～6(日)
「スポーツ劇」地点(演劇／京都)
- 3.12(土)～13(日)
「PORTAL」松本雄吉×林慎一郎(演劇／大阪、豊中)
- 3.17(木)～21(月・祝)
「部屋に流れる時間の旅」チェルフィッチュ(演劇／日本)
- 3.5(土)～27(日)
「河童よ、ふたたび」researchlight(リサーチプロジェクト／大阪)

VOICE

松本 雄吉
Yukichi Matsumoto
「PORTAL」演出/
演出家、維新派主宰



©Clippin JAM

今回の作品は都市論、わかりやすく言うとなSFですね。林くんの台本はものすごい量のセリフがあるんですけど、それをダンス作品みたいに受け止められるような舞台にできたらいいんじゃないかなと思っています。京都は反響が直に聞けるという印象があります。街の飲み屋でも見たよ見たよって反響があるような作品にしたいですね。

岡田 利規

Toshiki Okada
「チェルフィッチュ」/
演劇作家、小説家



©Kikuko Usuyama

劇場は社会のこと、自分たちが今置かれている状況を集中してより考えるための環境が整っている場所だと思います。劇場が社会から隔離して、遮蔽する場所でもあること。今回の作品ではそうした意味合いについても考えたいと思っています。

談ス

2016.3.24(木) 19:00開演

大植真太郎、森山未来、平原慎太郎による 異色のダンス・パフォーマンス！

バックグラウンドの異なる3人のダンサーが言葉を交わし、身体をぶつけ合い、めまぐるしく展開していくパフォーマンス。

【会場】サウスホール

【チケット】一般6,000円(全席指定・税込)／U-20 2,000円(20歳以下を対象としたチケット)

お問合せ

キョードーインフォメーション 0570-200-888(10:00-18:00)

主催：株式会社サンライズプロモーション東京、京都市、ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)

VOICE



(左から)大植 真太郎／森山 未来／平原 慎太郎
Shintaro Oue / Mirai Moriyama / Shintaro Hirahara

森山：真太郎さんは言いたいことのコアはあるけど喋るうちに崩壊していくし、僕は理屈っぽく喋るところがある。慎ちゃんとはしばらく黙っていて、でもすっと一言ポップな言葉を入れてくれる。「談ス」は、二項対立ではなく、そこにもう1人入って3人になることでの違和感や安心感を大切に、ドキュメント的な作品でもあります。

大植：この作品は、演劇で身体的なものが良いと言われたり、逆にダンスでは言葉を使うと言われたりすることへの、僕なりの答え。たとえば僕はボワントで踊っている女の子がこけた瞬間、顔が「!」となるのが好きで。それは表の顔が裏の顔に変わるからです。その面白さを大切にしている、失敗してもいい……。

森山：いやいや、失敗はいいけど決まったことはやろうね！

平原：確かに大植さんは、ミスにしても、ふとした時に出る声や言葉にしても、“取り除かない”。そこが面白さですね。海外で活動している大植さん、俳優としても活躍している森山さん、そして日本でコンテンポラリー・ダンスをやっている僕と、背景の違う3人が一緒に踊るこの場は、僕らにとっても貴重なんです。

インタビュー・文／高橋彩子 写真／片岡陽太